Ⅰ　研究の概要

１　研究主題

児童の自己指導能力の育成を目指して

～生徒指導の機能を生かした授業と学級経営の研究～

２　主題設定の理由

我が国における急速な少子高齢化による人口減少、経済成長の鈍化、情報化・グローバル化の進展などにより社会情勢は激しい変化の真っ只中にある。さらにＩＴ技術やＡＩ技術の進歩により産業構造も急速に変化している。このような予測困難な変化に柔軟に対応できる「生き抜く力」を育てることが現代の教育に課せられた使命である。

子どもたちが将来を力強く生き抜いていくために、「主体的に学び続けて自らの能力を引き出し、自分なりに試行錯誤したり、様々な他者との対話や協働をしたりすることにより、新たな価値を生み出していくことが出来るようになること」が大切である。そのために、「生きて働く知識と時代に求められる資質や能力」が必要であると言われている。

したがって、与えられた課題に対する解答や考え方など固定的な知識・技能を、受動的に学び覚え込むような学習はあまり意味をなさない。児童自身が目的を追求し、自ら課題を見つけ、試行錯誤しながら、自力で推進していく学習に転換していくことが求められる。そのためには、教師や親など大人の管理力・指導力による短期的な成果を求める教育ではなく、児童自身の「自己指導能力」を長期的に育む教育を推進していくことが重要である。

一方、本校の児童について教職員の協議で挙がった実態は、与えられたり指示されたりしたことをこなす力はあるものの、自ら課題を発見したり、解決したりする経験と能力に乏しいというものであった。これは学習場面に限定される傾向ではなく、日常生活のあらゆる場面に見られる傾向である。つまり学習の意義を見いだして意欲をもって取り組むための土台となる「自己指導能力」が低いのである。

新学習指導要領（平成２９年告示）の総則、第１章第４の１の（２）では、「児童が，自己の存在感を実感しながら，よりよい人間関係を形成し，有意義で充実した学校生活を送る中で，現在及び将来における自己実現を図っていくことができるよう，児童理解を深め，学習指導と関連づけながら，生徒指導の充実を図ること」とある。さらに解説において「学校教育において，生徒指導は学習指導と並んで重要な意義をもつものであり，また，両者は相互に深く関わっている。各学校においては，生徒指導が，一人一人の児童の健全な成長を促し，児童自ら現在及び将来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指すという生徒指導の積極的な意義をふまえ，学校の教育活動全体を通じ，学習指導と関連づけながら，その一層の充実を図っていくことが必要である。」と示されている。自立した学習の主体者として児童を育成することの重要度が高まる今、さらなる生徒指導の充実、すなわち積極的生徒指導の推進は学校教育の最大の課題の一つと言っても過言ではない。

自己指導能力とは、「この時、この場で、どのような行動をとることが適切であるか、自分で判断して行動する力」である。自己指導能力は、自己実現を図るために必要な資質・能力であり、児童の学習意欲、生活改善意欲を支える力である。学校の教育活動を、この自己指導能力の育成という目的の下、組織・整備し直し、意図的・計画的に指導していくことで一人一人の自己指導能力を高めることが、児童自身の主体的な学びを実現し、確実な学力向上につながるはずである。

以上の理由から、研究主題を決定し、授業改善、学級経営の充実、学校支援体制の整備を一体的に行う研究を進めていくことにした。

３　研究仮説

自己指導能力の育成という目的のもと、(1)一貫性のある学校支援体制を整備、(2)自己肯定感と共感的人間関係を育む積極的生徒指導による学級経営の充実、(3)生徒指導の機能を生かした教科指導の充実と道徳教育の充実、という３つの視点による指導改善を組織的、計画的に行うことで、児童の自己指導能力が高まるであろう。自己指導能力が高まることで、児童に望ましい生活態度や学習規律が身につき、学習意欲が高まり、基礎学力の向上につながるであろう。

◆研究の３つの視点ごとの手立ての柱

(1)生徒指導の機能を生かした教科指導の充実と道徳教育の充実

①生徒指導の３つの機能を生かした教科指導の充実

・目指す授業イメージ「すべての児童が参加し活躍の場が与えられる授業」の共有

一人一人の児童が、各教科の時間に、自分の考え方、感じ方を発揮して（自己決定)、授業に参加し問題解決を実感し（自己存在感)、たがいに相手の考えを受容しながら、それぞれのがんばりを認め合う（共感的人間関係)。これを日々の授業の中で行うことで、子どもは変容し、自己指導能力が高まるという考え方を全教職員で共有した。さらに、このイメージを具現化するためのキーワードとして「成功体験」を位置づけた。児童一人一人が成功体験を実感できる授業を目指して授業改善を進めている。

・チェックリストを活用した教職員による授業のふり返り

生徒指導の３つの機能を生かした授業のチェックリストを活用し、教職員自身が定期的に自らの授業をふり返り、日々の授業改善に生かしている。また、教職員にはそれぞれ違った強みがある。チェックリストによるふり返りを通して、互いの得意分野を知り、教職員同志のノウハウ共有にもつなげた。

・生徒指導の３つの機能、それぞれの授業場面における具体的手立ての共有

生徒指導の３つの機能を生かした授業がどのようなものであるかを指導過程・活動場面ごとに具体化し、共有しやすいように図にまとめた。毎回の授業ですべての手立てを取り入れることが目的ではなく、授業のねらいに即して毎時間一つでも具体的な手立てを取り入れることを目指して活用している。

・算数を中心とした授業研修

生徒指導の３つの機能を生かした授業は、すべての教科の授業で大切にしていくべきことであるが、まずは算数を中心に授業研修を進めることとした。教科を絞ることで指導力向上を加速し、その成果を他教科にも生かしていこうという考え方に基づいている。低・中・高学年ブロックごとに年間一回の研究授業に加え、研究２年目からは全学級において、学期に一回公開授業を実施し、日常の授業改善を図っている。結果的に日頃から互いの授業を見合う頻度が増え、授業改善や教材研究をきっかけとした教師同士の職員室での会話も増えることにつながっている。

②道徳教育と生徒指導の相互補完関係を生かした道徳教育の充実

・「考え、議論する道徳のための手立て」の活用

児童が考え、議論する道徳の授業にするためには、型にはまった授業ではなく、本時のねらいと児童の実態に合わせて、毎回がらっと進め方が変わるのが本来のあるべき道徳の授業である。そこで、「考え、議論する道徳のための手立て」を作成し、ア．導入・教材提示、イ．発問、ウ．話合い、エ．各活動、オ．表現活動、カ．板書、キ．終末、の７つの場面ごとに手立ての工夫を整理した。毎回の授業ですべての手立てを取り入れることが目的ではなく、授業のねらいに即して毎時間一つ

でも具体的な手立てを取り入れることを目指して活用している。

・「道徳だより」の発行

家庭との連携し道徳教育のより一層の充実は図るために、毎学期一回全学年「道徳だより」を発行している。授業実践の報告を中心に、児童の学習の様子や家庭で話し合ってほしいことなどを盛り込み、家庭向けに発行している。

・道徳の授業研修

低・中・高学年ブロックごとに年間一回の研究授業に加え、研究２年目からは全学級において、学期に一回公開授業を実施し、日常の授業改善を図っている。結果的に日頃から互いの授業を見合う頻度が増え、授業改善や教材研究をきっかけとした教師同士の職員室での会話も増えることにつながっている。

⑵ 自己肯定感と共感的人間関係を育む積極的生徒指導による学級経営の充実

①アンケートによる多面的・多角的な児童の実態分析

・毎学期末に「ふり返りアンケート」を実施

基本生活習慣に関する質問６項目、授業規律に関する質問８項目、自己肯定感に関する質問６項目、共感的人間関係に関する質問９項目からなる「ふり返りアンケート」を学期末に実施し、児童一人一人の意識、学級・学年経営の状況及び学校全体の傾向などを把握している。児童の意識の変容を捉えながら、重点目標の策定や課題の抽出に活用している。教師の感覚ではなく、児童の実態を根拠とした学級経営につなげている。

・アンケート結果の分析と学級経営改善研修

アンケート結果は、前学期の結果や前年同時期の結果と比較し、その変容や推移の分析に活用している。さらに、学級別に児童の自己肯定感、共感的人間関係の自己評価数値をもとに、プロットマップを作成し、学級の傾向把握や個別支援が必要な児童抽出に役立てている。夏季教職員研修では、１学期末に行ったアンケート結果の分析を基に、２学期の具体的なアクションプランを協議し、学級経営の充実を図ってきた。

・家庭学習実態調査の実施と分析

家庭での学習時間、家庭学習の自発性、自主学習の頻度、自主学習内容を自分で考える力などを保護者向けアンケートにより把握・分析している。家庭学習について考える学級活動を授業参観時に行い、保護者との個人面談期間前に自主学習強化週間を位置づけ、保護者面談時にはこの１週間の取り組みに対するふり返りを保護者と共に行い、その後の方向性について共通理解を図っている。そして、個人面談から約１ヶ月後の２学期末にアンケートを実施し、児童の変容を把握している。

・Ｑ－Ｕの実施

３年間の研究成果として児童の変容を全国の傾向と客観的に比較できるように、Ｑ－Ｕを実施した。自校独自の「ふり返りアンケート」と組み合わせ、より詳細な児童理解及び学級経営診断に活用する。

②教職員同士の議論やノウハウ共有

・学級経営充実のためのグループ研修と「ＳＨＩＮＫＡＩ知恵袋」

学級経営について悩んだり迷ったりしていることや、よりよい指導法について知りたいと思っていることなどを教職員から募集し、集約された１４のテーマについて、４つの分科会に分かれ、複数回の協議を行った。その結果をＱ＆Ａ方式の「ＳＨＩＮＫＡＩ知恵袋」としてまとめていった。校内サーバーの教職員共通フォルダに保存し、常に更新・閲覧可能にした。このノウハウ集作りの

最大のねらいは、この研修をきっかけとした「学級経営についての学び合いの場作り」である。担任教師一人一人の個性やそれぞれの価値観、教育哲学を尊重し合うことを前提に、様々な考え方や指導方法を学び合い、より幅広い選択肢の中から、教職員一人一人がそれぞれの課題意識に応じて取捨選択していくことができる「役立つノウハウ集」づくりをイメージした。

・学級経営についての自主勉強会

「学級経営ノウハウや指導法の工夫について、他の教員から学びたい。」という気持ちは、本校教職員に共通のものであった。しかしながら、多忙を極める日常の中で、なかなか教え合ったり、学びあったりする機会を作ることができないのも実情である。そこで職員集会後などの 15 分程度の時間を使った自主的な勉強会を実施している。「〇〇先生から学ぶ会」、「授業で手が挙がる学級経営について」など、テーマや内容を事前に告知し、希望する教職員が集まり、リラックスした雰囲気の中でそれぞれの実践について失敗談も交え語り合う場である。途中参加、途中退席も認められたオープンな場であるが、毎回予定した時間を大幅に超え、白熱した学び合いが行われている。

⑶ 自己指導能力の育成という目的のもと、一貫性のある学校支援体制を整備

①生徒指導体制の整備

・月例部会の充実

従来は児童の問題行動等の情報共有が主な機能であった。この月例部会を、各学年や学級の積極的生徒指導推進の具体策や成果について協議する場に転換した。問題行動への組織対応が重要であることに変わりはないが、それ以上に問題が起こりにくい学級風土や教師と児童の信頼関係構築につながる積極策を協議することに価値を置いた。

・全体計画・年間計画の整備

教師による管理・指導的側面が強かった生徒指導の全体計画や年間指導計画を、児童の自己指導能力育成という観点から見直しを図った。児童に目標を示したり、規律を徹底したりする指導から、児童自身が目標や課題意識をもったり、学習に必要なルールの必要性を実感したりする機会を創る指導へ、徐々に転換を進めている。

・児童理解と情報共有の促進

年２回行っていた全教員による児童理解と情報共有のための研修会に加え、児童の意識調査をもとにした児童理解や個別支援策検討の場を年２回増やした。

②特別活動の再構築

・自己肯定感・共感的人間関係を育てる授業プランの導入

構成的グループエンカウンターやアサーショントレーニングなど、毎学期当初に実施できる授業プランを発達段階に応じて導入した。児童が自分の存在の大切さを実感したり、その良さを見いだしたりする自己肯定感を高めるための授業、友達と協力し合ったり相手を大切にしたりすることの良さを実感する共感的人間関係を育てるための授業をそれぞれ毎学期当初に実施している。

・全体計画・年間計画の整備

学校行事や学年行事において、児童と目的を共有し、主体的に活動できるようにするために、実行委員制度の活用やクラブ・委員会の指導方法の見直しを進めている。

４　目指す児童像

◆自己指導能力が高められた子ども像（自発性・自律性・自主性・協調性）

⑴ 自発的（他者の指示ではなく、自分の意志でスタートする）

○やろうとする意欲に燃えている。

○問題があることに気づくことができる。

○目標をもち、課題を見いだすことができる。

⑵ 自律的（正しい方向に向けて自己をコントロールする）

○計画を立て、うまくいかないときは計画を見直すことができる。

○自分で決めたことをやり切ろうとする。

○「～したい」だけでなく「～するべき」を考えて正しい判断ができる。

○自分の役割を自覚し、責任をもってやりとげる。

⑶ 自主的（他者に依存せず、自分の力でやり切る）

○できる限り、自分の力で解決しようと努める。

○学習や活動を自ら振り返り、正しく自己評価できる。

⑷ 協調的（自分にとってだけでなく、相手にとってもよい行動を選ぶ）

○みんなが気持ちよくすごすためのルールの必要性を理解している。

○ルールを時と場に応じて柔軟に活用できる。

○自分の意見だけでなく、自分と異なる他者の意見も尊重できる。

◆発達段階に応じた目標と指導方針

⑴ 低学年

①目標：親や教師など大人の指示やルールの意味を理解し、指示・ルールにしたがって学習・行動ができる子。

②指導方針：望ましい生活態度や学習規律について、その意味を児童自身が自分の言葉で説明できるようにさせ、大人の話を素直に聞ける子に育てる。

⑵ 中学年

①目標：親や教師など大人の指示を最小限に、自分の判断で試行錯誤しながら、目的意識や目標をもってよりよい学習・行動ができる子。

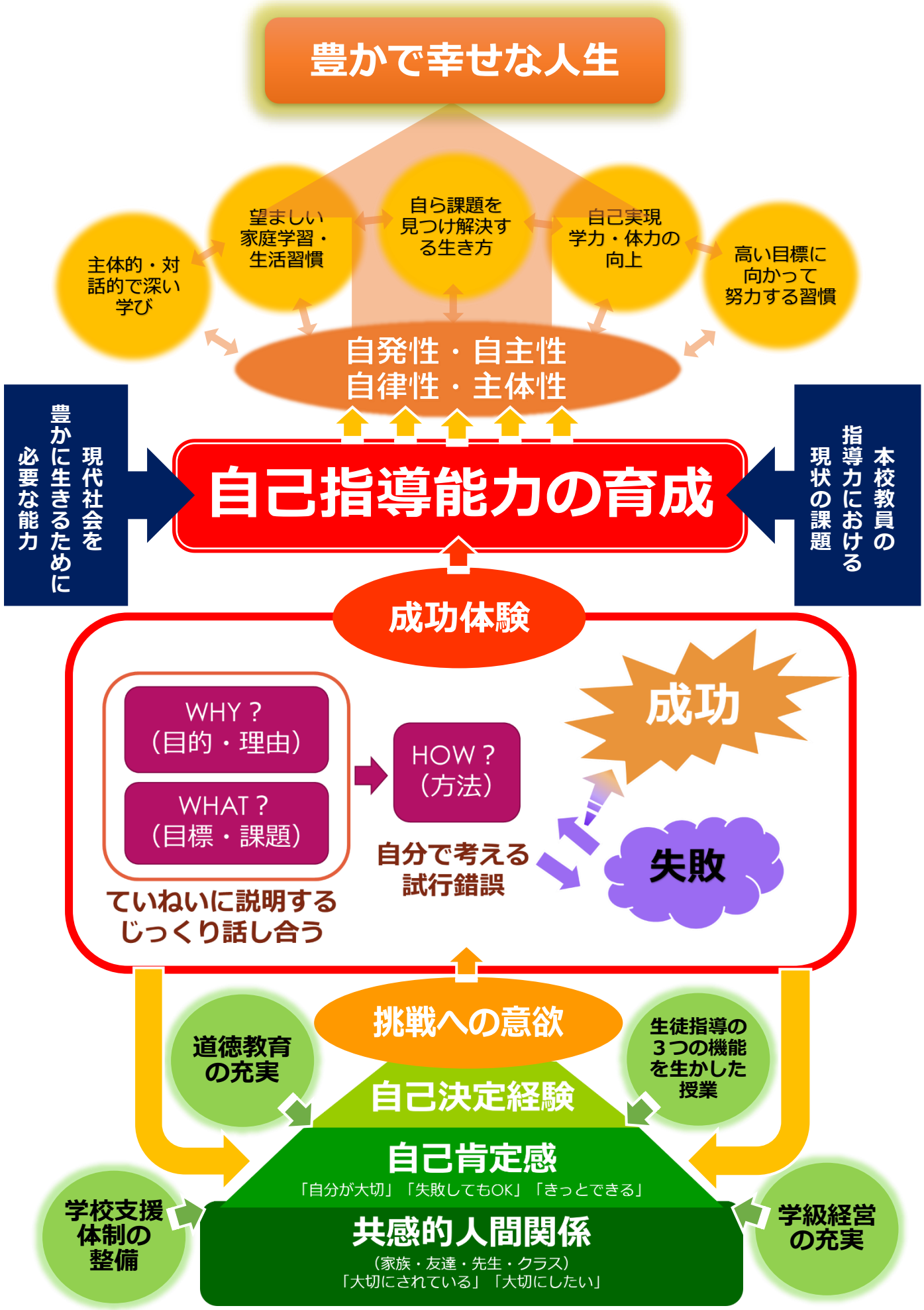
②指導方針：学校生活について個人・集団両面において、児童自身に課題意識をもたせ、その改善策の立案、実行、評価というサイクルを意図的・段階的に経験させる。

⑶ 高学年

①目標：自発的・自律的・自主的・協調的に、望ましい態度で学習・行動し、目標達成に向かってねばり強く試行錯誤できる子。

②指導方針：学校生活について個人・集団両面において、幅広い視野に立って児童自身に課題意識をもたせ、その改善策の立案、実行、評価というサイクルをあらゆる場面で機能させる習慣を身につけさせるように、計画的・継続的に指導する。

自己指導能力育成についての研究構想



５　研究構想図について

◆成功体験について

研究の歩みを進める中で、児童の自己指導能力を高めるためには「成功体験」をいかに数多く積ませるかが鍵となるという仮説に到達した。成功体験により児童は自信と意欲を高める。この自信と意欲が、さらなる成功体験へと児童を駆り立てる。この繰り返しにより、児童の自己指導能力は高まっていくと考えたのである。

子どもが自発的・自主的に活動を始めるためには、WHY（理由や目的）、WHAT（目標や課題・問題）、HOW（方法）の３つが必要であると言われている。今までの本校教員の指導は、児童に失敗させないために、HOW（方法）の指導に偏りがちであった。短時間で効率的により多くの児童が正解できるように、HOW（方法）を教え込み、そのことが児童の自発性や自主性を低下させてきたのではないかという反省に至ったのである。この教え込みによる失敗を排除した成功は、児童自身にとっては「成功体験」の自覚につながらない。したがって、自信や意欲を高めることにつながらないのである。

そこで、あらためて授業や学級経営における生徒指導のあり方を見直し、HOW（方法）を与えたり教えたりすることは最小限にとどめることに留意した。その分、WHY（理由や目的）について十分に児童と教師が話し合い、これをしっかりと共有することを重視した。さらにWHAT（目標や課題・問題）に必要感や必然性をもたせ、活動を始める前にしっかりとターゲットを理解させることも同様に重視することに対し、教員の共通理解を図った。

HOW（方法）を児童が試行錯誤しながら活動する場合、失敗はつきものである。時間内で解決できないこともある。しかし、その分、それを乗り越える楽しさや目標を達成したときの充実感や満足感は得がたい経験となる。こうして得られた「成功体験」こそ、児童の自己指導能力育成のために価値ある経験となるのである。

◆挑戦への意欲について

児童の価値ある成功体験には、試行錯誤に　　向かう挑戦意欲を育てなければならない。成功　　しい児童は、そもそも自力解決や試行錯誤に向かう意欲が乏しい。こういった児童を挑戦へ向かって意欲づけるためには、共感的人間関係を土台として自己肯定感・自己存在感を高めることが有効である。そのために生徒指導の３つの機能を生かした授業改善を進めることと、同様の機能を学級経営の手法でも生かすこととした。そのためには道徳教育の充実も欠かせない。さらに、細やかな児童理解を進め、児童一人一人の実態に合わせて小さな成功体験をスモールステップで踏めるように、個別の支援の充実も図ることとした。